

一定の表情印象を与える顔のタイプの決定要因

The recognition of facial types on specific facial impressions

上田彩子^{1) 2)}、須賀哲夫³⁾

Sayako UEDA^{1), 2)}, Tetsuo SUGA³⁾

E-mail : sueda@st.jwu.ac.jp

和文要旨

従来の表情認知研究領域では、その多くが、人間が共通に表出する表情の定型的な運動変化パターンという側面に焦点を当てている。しかし他方で、顔は細部の個人差が顕著な組織であり、この個人差は、表情印象決定の際の重要な要因といえる。この問題を基に、本研究では異なる表情印象を与えやすい2つの顔タイプの設定を行い(negative type : 一貫してnegativeな表情印象を与えやすいタイプ、positive type : 一貫してpositiveな表情印象を与えやすいタイプ)、これらの顔タイプの決定要因について検討を行った。実験刺激には、顔タイプ間で部分的に入れ替えを施した、合成顔画像を用いた(例 : positive typeの眼の領域と、negative typeの残りの顔領域を合成した顔画像)。その結果、顔から各顔タイプに特有の一定の快-不快印象を判断する際、決定的に機能するのは、表出表情に関係なく、口の形状情報および微笑み表出に伴う口の運動変化であることが認められた。そこで、中立表情時の口の形状を基にした顔タイプの判別法を提案した。

キーワード : 顔写真、顔のタイプ、個人差、表情印象

Keywords : Facial images, Facial types, Facial individuality, Facial impression

1. 緒言

顔は種の普遍的構造に基づき、一様に酷似した形状をしている(水平に配列された2つの眼、中央に配置された鼻と口、左右対称の形状)一方、個人差が顕著な組織である。人によって、眼・鼻・口の形状や大きさは異なる[1]-[3]。

個々の顔が有する個人差は、眼や鼻などの顔に特徴的な部位の形状や色だけではなく、表情筋といった皮下の筋肉構造にまで及んでいる[2]。表情筋の差異は、表情表出の際の運動変化にも影響を及ぼし、個々の顔が表出する表情に独自の性質を与えているといえる。個々の顔が表出するわずかな表情の差異(表情の個人差)の情報が、人物(特によく見知った他者)の同定において有効であることは、多くの研究で示されている[4]-[9]。

表情を体系的に研究したDarwin[10]に端を発する従来の表情認知研究領域では、その多くが、

表情の「ヒトという種が一般的に表出する、感情に対応した体系的・定型的運動変化パターン(例えば、喜び表情における口角上昇という運動変化)」という側面に焦点を当てている。すなわち、表情にヒトという種の共通性を求める視点(表情の種共通性 : species-specific facial expressions)から捉えているといえる。これに対し、表情の個人差という側面に焦点を当てることは、表情に個体ごとの特異性を求める視点(表情の個体特異性 : individual-specific facial expressions)から捉えていると考えられる。表情の個人差の解明は、表情の種共通性の解明と共に表情研究において相互補完的に進められるべきだといえる。

顔と表情の個人差について中心的に検討を試みた例として、上田・須賀の研究[11]がある。上田らは、他者が特定人物の表出した表情の印象強度(ある表情がどれほど強くその表情に対応した

¹⁾ 日本女子大学大学院人間社会研究科、The Graduate School of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University

²⁾ 日本学術振興会、Japan society for promotion of science

³⁾ 日本女子大学人間社会学部、The Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University